

広島県立大学経済学部

助教授 徳野 貞雄

村おこしの礎
イシズエ

福岡県矢部村は、大分県と熊本県との県境を接する山狭の村である。典型的な過疎山村である。その村に詩人がいる。人間がいる。

村

村はかつて人間の故郷であった
胸底のなかで村は青空をうかへ
地下水をこんこんとひめていた

その村にそびえた朴訥な森林を倒し
メカニックな化粧をこらした現代が
目に見えない鉄拳をふりあげ
村をならしてしまった

「カソカソ」と奇態なつばやきをあげ
うつむいている村……
しかしそれが文明であればそれもよい
それが現代であればそれもよい

うばわれぬ胸底の青空と地下水の声を
こっそり我々は密造して
空洞の巷へ売り歩

右の詩は、山の小学校教員を続けながら、山の暮らしを言葉に錘ぎ続けてきた椎窓猛先生（現矢部村教育長）の詩である。文化を持つ村は強い。椎窓先生のような詩人を持つ村は、簡単にへこたれない。枯草の下から花を咲かせる準備を黙々としている。

矢部村も、全国の過疎農山村と同様、高度経済成長期以降急激な人口流出と産業基盤の脆弱性から、典型的な過疎化の道程をたどってきた村である。しかし、現在矢部村は「小さな村の大きな挑戦」をくり返し、『杣の里』づくりを着々進めつつある。分類的にいえば、都市・山村交流の地域振興事業であり、財団法人『杣の里』を設立し、さまざまな地域活性化事業に取り組んでいる。全国の同種の事業の中でも、数少ない成功事例でもあり、モデルとして国土庁長官賞も受けている。

昨年からは、福岡市の繁華街にアンテナ・ショップ『ソマリアン』も出店している。『ソマリアン』は、矢部村のアンテナショップであるが、矢部村の特産品のお茶や椎茸は全く



略歴

徳野 貞雄 (43歳)
九州大学大学院文学研究科博士課程修了
現職 広島県立大学経営学部助教授
専門 農村社会学、地域振興論
現在、農業社会学なるものを構想中
「生活農業論」の理論化を模索中
九州・中国地方を飛び回っているフィールド派研究者

売っていない。売っているのはカレーライスと水と矢部村の情報だけである。少し変わっている。一昨年開催した矢部村フェアでも、特産品は売らず、会場のファッションビルの大フロアーに、杉の木を五〇本おっ立てて、草木染の布を巻きつけただけで、一週間押し通した、村の文化を売るフェアだと位置づけていた。

私は、よく矢部村に行く。行くと、村の青年達が旅館に集まってくれる。ある日、誰れも来なかった。真夜中近く、電話で焼鳥屋に呼び出された。彼ら全員、黒いスーツを着ていた。「友達のジィチャンが亡くなったから、夜伽に行っていた」という。現在、都会で友達の祖父が亡くなったからといって、何人の青年が夜伽に行くだろうか。私は、この夜伽に村おこしの礎を感じる。

青年達は、青年団活動で花火も打ち上げれば、演劇もする。弁論大会で全国優勝している者もいる。『杣の里』事業の強力なスタッフでもある。しかし、これらの活動の源は、夜伽に行くことだと思う。私は、現代の都会の青年は、「地域社会の失業者」だと考えている。地域社会のために何をしてよいのか判らないし、地域の人々からも全く期待されていない「失業者」なのである。人々に期待されていない者たちに、地域の文化は根づかない。

青年達がグループでイチゴを始めた。反当たり八万円の借地である。仲間を増やし規模を拡大したいと思っている。何も、一〇haとかではない、せいぜい一〇aである。しかし、地権者のジィチャンは、「自分の米は、死ぬまで我田で作りたい」という。息子が九九%帰村する見込みはないバアチャンに、六畝の荒畑を売ってくれといっても、「それだけは、こらえてくれ」といわれる。矢部村には耕地が少ない。年寄の耕地への執念はすさまじい。

青年達は悩んでいる。自分達の経営戦略と年寄の執念との間で悩んでいる。でも彼らは、「ジィチャンもバアチャンの気持ちも分るんよね。岸壁の母だもん」という。彼らに「村外の平場の方で、農地を借りたら」といったら、「村外に出たら、矢部人間じゃなくなる。年寄と気長につき合いながら、考える。」といていた。彼らの作った赤いイチゴは、今日も福岡の「ソマリアン」で、〇L達に食後のデザートとして食べられている。

